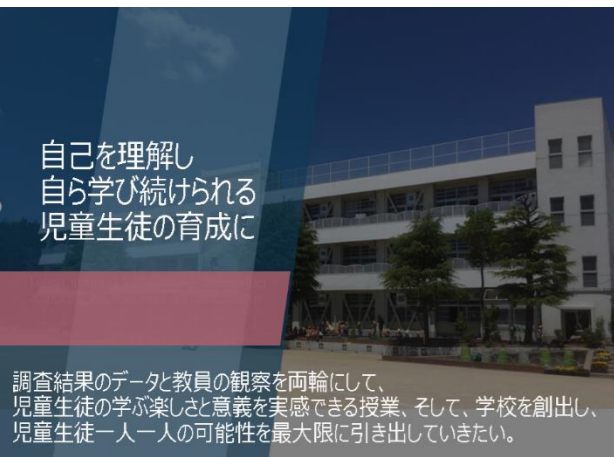


京都丹波 まな Viva!

令和6年3月19日 No.61
京都府南丹教育局発行

「京都丹波 まな Viva!」は、学校と先生を応援する南丹教育局の学びのニュースです。

令和5年度から京都府学力・学習状況調査～学びのパスポート～が実施され、令和6年度は全ての小・中・義務教育学校において、学力ステップや非認知能力、学習の方法等の「伸び」がわかるようになります。しかし、個々の子どもに焦点をあて、データと普段の観察からその子のための支援や手立てを考えていくことが大切であることは変わりません。子どもたち一人一人の可能性を最大限に引き出せるよう、データを効果的に活用していきましょう。



自己を理解し
自ら学び続けられる
児童生徒の育成に

調査結果のデータと教員の観察を両輪にして、児童生徒の学ぶ楽しさと意義を実感できる授業、そして、学校を創出し、児童生徒一人一人の可能性を最大限に引き出していきます。

こんな児童生徒、教員を育成したい

児童生徒

自らの成長が見えることで、学ぶ意義を実感し、主体的に学習に取り組む
児童生徒

自らの学習の特徴を知り、学び方を自己調整しながら学習に取り組む
児童生徒

自らの変容を客観的に捉え、自ら「こうありたい」と目標設定できる
児童生徒

教員

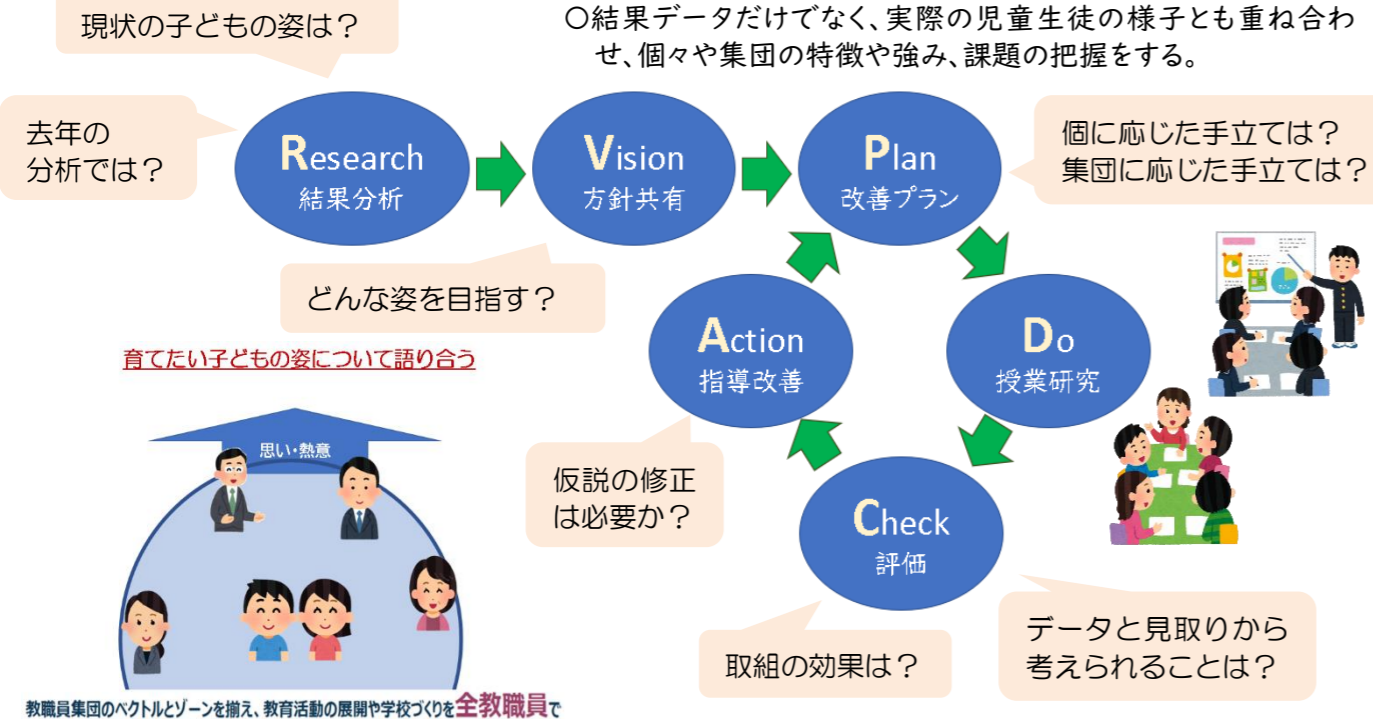
児童生徒の伸びと変容から自らの指導を振り返り、よりよく指導を改善できる
教員

より多面的に児童生徒を捉え、個に応じた学び方の支援ができる
教員

他の教員の良いところを結果データからも学び、より指導力を高めようとする
教員

RV-PDCA サイクルの確立を!

- 児童生徒個々の状況や集団の傾向を把握する。
- 経年比較により個々の変容や集団の変容を把握し、その要因を考えたり、取組の効果を検証したりする。
- 結果データだけでなく、実際の児童生徒の様子とも重ね合わせ、個々や集団の特徴や強み、課題の把握をする。



「伸び」がわかるデータはどれ？

【01 学力分析シート】基礎データ

2年間の「学力ステップ」と「伸び」

学力ステップを36段階にして、昨年度と今年度を比べたときの差「＝伸び」がわかります。

非認知能力や学習の方法、主体的、対話的で深い学びについての回答状況の変容がわかります。

| 学年 | 科目 | 前年度 | 本年度 | 伸び |
|------|----|-----|-----|----|
| 7-C | 国語 | 3 | 6-C | 3 |
| 10-A | 国語 | 9 | 7-A | -2 |
| 7-C | 算数 | 0 | 7-C | 0 |
| 7-C | 算数 | 3 | 6-C | 3 |
| 7-C | 算数 | 3 | 6-C | 3 |
| 7-C | 算数 | 3 | 7-B | 4 |

【01 学力分析シート】〇〇と学力の伸びの傾向

非認知能力と国語の学力の伸び

学習の方法と国語の学力の伸び

縦軸を「学力の伸び」、横軸を「概念」にしたときの散布図です。この例からは、自己調整に肯定的に回答している子どもも伸びているということがわかります。

【01 学力分析シート】学力の伸び方による質問項目への回答傾向

学力が伸びた児童生徒、伸びなかった児童生徒の人数です。

伸びた児童生徒の割合です。

| 科目 | 学力が伸びた児童生徒 | 伸びた児童生徒の割合 |
|----|------------|------------|
| 国語 | 54人 | 70.1% |
| 算数 | 23人 | |

【05 学力分析データ(ステップ・学力値・伸び)】

学力ステップの推移

学力ステップの伸び

学力値の推移

学力値の伸び

1人ずつの学力ステップの推移、伸びの様子等がわかります。

【06 各実施主体の調査結果票】

最大の層(最も学力が高い児童・生徒が属する学力ステップ)

75パーセンタイル(学力の高い層に当たるときに、上から数えて25%にあたる児童・生徒が属する学力ステップ)

中央値(学力の高い層に当たるときに、上から数えて50%にあたる児童・生徒が属する学力ステップ)

25パーセンタイル(学力の高い層に当たるときに、上から数えて75%にあたる児童・生徒が属する学力ステップ)

最小値(最も学力が低い児童・生徒が属する学力ステップ)

【07 学力の伸びの状況】グラフ

小4

小5

小6

全体

それぞれの位置にいる子どものステップです。例えば、中央に位置する子どものステップは、20(7-B)です。

この割合は、学力を伸ばした子どもの割合です。

【07 学力の伸びの状況】表

| 学年 | R5学力推定結果 | | | | R4学力推定結果 | | | | R3学力推定結果 | | | |
|--------|----------|-------|-------|-------|----------|-------|-------|-------|----------|-------|-------|-------|
| | 学力ステップ | 人数 | 割合 | 中央値 | 学力ステップ | 人数 | 割合 | 中央値 | 学力ステップ | 人数 | 割合 | 中央値 |
| 小学校4年生 | R-1 | 1,584 | 21.8% | 1,100 | R-1 | 1,100 | 21.8% | 1,100 | R-1 | 1,100 | 21.8% | 1,100 |
| 小学校5年生 | R-1 | 1,483 | 20.9% | 1,089 | R-1 | 1,089 | 20.9% | 1,089 | R-1 | 1,089 | 20.9% | 1,089 |
| 小学校6年生 | R-1 | 1,372 | 19.4% | 1,000 | R-1 | 1,000 | 19.4% | 1,000 | R-1 | 1,000 | 19.4% | 1,000 |

その学年におけるこれまでの学力ステップ等がわかります。

【07 学力の伸びの状況】異なる年度の同学年の比較(グラフ)

| 小学校第6学年 | 年度 | H30 | R1 | R2 | R3 | R4 | R5 |
|----------|----|-----|----|----|----|----|----|
| ステップ(平均) | | - | - | - | 21 | 19 | 20 |

学年における学力ステップの経年変化がわかります。

どうやって分析するの？

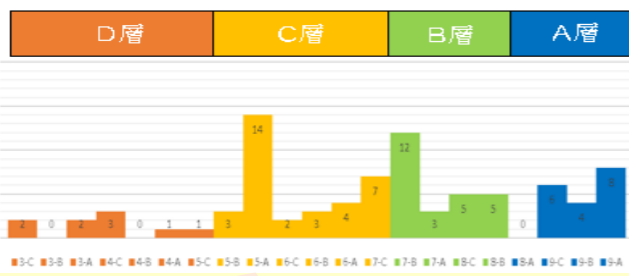
- 2年目以降になると、質問調査の回答結果と教科の学力値の伸びとの関係の把握が可能になります。
- 学力の伸びの背景にある効果的な指導方法は校内で共有し、波及していくことが大切です。
- 義務教育修了段階にどのような力を付けたいのかを中学校区で共有し、小中で同じデータを見ながら、発達段階に応じてどのような指導・支援ができるか考えることも効果的です。

帳票以外の分析例をちょっと紹介

学力ステップの経年変化

| 学年 | 小4 | 小5 | 小6 | 中1 | 中2 | 中3 |
|-----|----|----|----|----|----|----|
| 現中3 | | | | | 21 | 23 |
| 現中2 | | | | 20 | 22 | |
| 現中1 | | | 21 | 21 | | |
| 現小6 | | 20 | 20 | | | |
| 現小5 | 19 | 19 | | | | |
| 現小4 | 17 | | | | | |

今年度の数値



学力ステップ毎の人数をヒストグラムで整理

教育活動、研究推進の成果検証をするために、活用するデータを選択することが大切です。

伸びについて

京都府教育委員会

活用例1) 一人一人の児童生徒の多面的な理解と支援

データから

計画的に学習に取り組んでいると回答している児童生徒ほど、学力が伸びている傾向が見られます。しかし、赤で○を付けた児童生徒は「計画的に取り組んでいるのに結果が出ないと悩んでいるのでは？」

普段の観察から

Bさんですね、最近頑張っても結果がでない悩んでいます。質問調査の結果を見ると、他の人の意見を取り入れて自分の考えを深めていくことが苦手なようです。話し合い活動中の様子を気付けて見て、アドバイスをしましょう。

仮説再構築へ

活用例2) 共通目標をもち、発達段階に応じた指導につなげる小中一貫した教育

ゴールの設定

学力はしっかりと身に付けながら、さらに、中学校卒業後も自ら学び続ける児童生徒を育てたい。小中で同じデータを見ながら、発達段階に応じてどのようなことができるかを考えよう。

データから

各学年の、学習の方法と学力の伸びの関係を見ると、学年が上がるほど相関関係が強くなっていく傾向が見られます。小学校の低学年の段階から、計画的に学習する習慣を身に付けておくことが、学年が上がるにつれて大きな差となって表れてくるのではないのでしょうか。義務教育9年間の発達段階に応じて、計画的に学習に取り組むのはどのような姿が中学校区で検討し、ルーブリックを作成するのはどうでしょうか。

仮説再構築へ

義務教育修了段階にどのような力を付けたいのかを中学校区で共有し、それぞれの発達段階に応じた指導・支援を

「着目する概念」を伸ばしている児童生徒

学力の「伸び」

例えば

「学びに対する積極性」を伸ばしている児童生徒

学力の「伸び」

学力ステップと伸びの相関をExcelのピボットテーブルで整理

伸び

| 伸び | 2-A | 3-A | 4-A | 4-B | 4-C | 4-D | 5-A | 5-B | 5-C | 5-D | 6-A | 6-B | 6-C | 6-D | 7-A | 7-B | 7-C | 7-D | 8-A | 8-B | 8-C | 8-D | | |
|----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|--|--|
| 12 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 9 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 8 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 7 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 6 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 5 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 4 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 3 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 2 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 1 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 0 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| -1 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| -2 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| -3 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |

2-A-3-A-4-C-4-B-4-A-5-C-5-B-5-A-6-C-6-B-6-A-7-C-7-B-7-A-8-C 8-B-8-A 学力ステップ

どうやって活用するの？

「学校改善プラン」の活用を！

- 学校改善プランは、RV-PDCAの視点で作成されています。この学校改善プランを活用することで、そのサイクルが自然に回り始めます。
- 教員の経験（観察）と結果データとの両輪で結果の背景も含めて分析することが、具体的な手立てにつながります。

単元・授業づくりの視点に！

- 「自己調整」や、「学びに対する積極性」等の非認知能力、「表層理解」や「精緻化」等の学習の方法については、質問項目を確認しながら、どのような力を示しているのかを確認し、単元や授業の中で発揮する場面を設定していくことが大切です。

令和5年度第2回京都府学力・学習状況調査～学びのパスポート～に係る活用・分析研修会より



演習用シート

重点的にはくみみたい非認知能力

単元の評価規準

身に付けさせたい学習方法

Aさんの現在の状況

Aさんの手立て

はくみみたい非認知能力の現状

全学年、前単元までに身に付けている学習内容

身に付けさせたい学習方法についての現状

算数・数学

集団の手立て

黄色：教科

水色：非認知能力等

緑色：学習方法

国語・英語

個への指導の工夫：どの場面での児童にどのような支援・手立てを行っていくのかを考える。

非認知の視点 具体的な手立て 学習の方法

集団への指導の工夫：スモールステップを加えたり、順序を入れ替えたり、差し引いたり……

非認知の視点 具体的な手立て 学習の方法

単元に位置付けるイメージ

授業に位置付けるイメージ

京都府学力・学習状況調査～学びのパスポート～ 取組状況調査の結果から

個人結果票をもとに、児童生徒が自らの学びを振り返る時間はありましたか？

なかった。14%

あった。86%

振り返りがあった場合、どの時間に行いましたか。

その他 5%

朝学習 5%

教科の時間 42%

学級活動 48%

個人結果票をもとに、結果の見方や考え方について、保護者に説明をしましたか。

説明した。30%

説明していない。70%

分析結果を踏まえ、「個に応じた指導・支援方法」を具体的な手立てとして校内で検討しましたか。

検討していない。5%

検討した。95%

分析結果を踏まえ、「集団としての指導・支援方法」を具体的な手立てとして校内で検討しましたか。

検討していない。5%

検討した。95%

「目指す子ども像」に達するための仮説について、必要に応じて修正しましたか。

修正した。27%

修正していない。73%